

覚悟する時間得た

迫る2025 シツク

4

7部 胃ろうの選択

筋萎縮性側索硬化症（ALS）で昨年3月に亡くなった横浜市神奈川区の田渕誠紀さん（享年68）。亡くなる約9カ月前、口から食べるのが難しくなり胃ろうにした。妻の倫子さん（70）は、当初「胃ろうにせず、自然に逝ってほしい」と考えていたが、「本人が望むなら」と同意した。

「倫子さんは、胃ろうにしたことを、本当はどう思っているのだろう」。胃ろうを勧めた訪問看護師の大西智子さん（56）は、ずっと気になっていた。記者は、大西さんと一緒に、倫子さんの自宅を訪ねた。どうして、最初胃ろうに消極的だったんですか？

「本人の気持ちを考える」と、せつなくて……。意識がはっきりしているのに、妻にすべて世話してもらおうわけですから」。もちろん誠紀さんには、少しでも生

きていてほしい。でも、それがかえって本人を苦しめるのではないか……。そんな葛藤がずっとあった。

大西さんが「あのころは、2人で随分話し合いをしたね」と語りかけると、倫子さんは「そう？ あまり覚えてないなあ」。2人

憶が薄かった。

今、胃ろうにしたことは、どう思いますか？

しばらく考えた後、こう言った。「結果的には、胃ろうにしたことで、（誠紀さんの死を）受け止める時間ができたと思う。私にとっては、必要な時間だったのかもしれない」



「お父さんは、病気を知り沈んでいたときに、俳句と出会ったんです」。訪問看護師の大西智子さん（左）と田渕倫子さん（右）の会話。横浜市神奈川区

最後に、誠紀さんの俳句集を見せてもらった。「年の瀬や 覚悟の出来ぬ 人のまま」「二歳児の 髪の匂いや 春浅し」……。病気の闘いや孫たちへの思いなどを詠んだ。胃ろうのおかげで、その時間が延びたのかもしれない。

倫子さんは、つらかったことも思い出し、約3時間にわたり話をしてくれた。取材を終えた帰り道、大西さんは「私とのやりとりをあまり覚えていないのは、精神的に本当にきつかったからだと思う。でも胃ろうにしてからの9カ月が必要な時間だった、と聞き、少し気が楽になった」と吐露した。

田渕さんの長男の妻（49）にも、話を聞いた。自身の父親（82）は、転落事故でほぼ寝たきりになり、約6年前に胃ろうをつくり、今も入院中だ。面会に行く「何か食べたい」と訴えるという。

「正直、これでいいのか、気持ちが揺れることもある。でも母の心の支えでもあり、私たちが命の灯を消すことはできない。胃ろうは、始めるのはたやすいが、終わりは非常に難しい」。同じ胃ろうでも、状況によってその意味は少し違う。